

ラオス農村における移住に伴う生存基盤の再編に関する研究

—天然ヤシ科植物チャンデーの分布とその利用から—

平成 23 年入学

派遣先：ラオス人民民主共和国

福島 直樹

キーワード：ラオス，農村，非木材林産物（NTFP），ヤシ科植物，人的ネットワーク

対象とする問題の概要

ラオス人民民主共和国（以下ラオス）では 1990 年代前半から貧困削減に取り組んでいる。自然環境破壊や麻薬栽培の主たる原因にも貧困問題があるとされ、政策の優先課題に位置づけられている。そうした政府や NGO、国際機関の取り組みによって、現在の「貧しい農村」観がつくられたのではないか。先行研究では、代替商品作物の導入（Neef 2010）や非木材林産物の活用（Sunil 2010）、家畜飼養や肥料導入のための金融面での支援（Phinseng 2006）など、貧困削減のための取り組みの有効性がさまざまに検討されてきた。しかしながら、住民が直面する旱魃や病虫害による不作、病気や怪我、子供の就学による労働力不足等の課題がどのように実生活上の課題として顕在化するのか十分に検討されてこなかった。また、これらの問題発生リスクを軽減するために彼らが構築してきたであろう独自の仕組みについて検討されてこなかった。そうして貧困問題の解決を目指した研究や事業は、世帯の生計を向上させることに傾倒しがちであった。



写真 1. 村周辺の景観，山頂付近に石灰岩の岩肌が白くみえる

研究目的

ラオス農村に居住する人々は、どのようなスケールでどのように暮らしの再編を進めているか。この再編の際に、村人にとっての課題はどこにあるか。杉原ら（2010）は生存基盤という分析概念の導入を

提案している。ここでいう生存基盤は、「個人や地域社会が自己を維持するために必要な物質的・精神的諸条件 (The basis of livelihood catering for survival, reproduction and subsistence)」と定義される。本研究の目的は、伝統や習慣による生産と分配を考慮しつつも、消費や再生産を切り離さない生存の視座をもつことにより、農民独自の生存維持の仕組みを再評価することにある。具体的には、移住後の生活再編にともなうリスク制御の技法を明らかにすることを目的とする。今回の調査では、林産物の利用が移住の前後でどのように変化したかについて、主要な林産物資源であるチャンデーの分布と世帯ごとの利用状況を調べた。



写真2. チャンデー、森の樹冠が開いた一帯に分布する

フィールドワークから得られた知見について

チャンデー (学名 : *Dracaena loureiri* Gagnep.) は、ヤシ科の植物で、標高 500–2000m に分布するとされる (NAFRI 2007)。調査村周辺で確認した約 20 株は 990–1172m に分布した。村人の主な居住域は 945m 付近にある。盆地に形成された村で、周囲を取り囲むように山と森が広がっている。村内で天然林チャンデーの所有者や利用権は定まっておらず、利用に制限はない。隣村との境界として稜線が利用されているが隣村からの立ち入りが問題になったことはない。チャンデーは岩場や樹冠の開けた高地を好み、一定の区域に 1 株のみ単独に点として分布する場合と、面的な広がりをもち優先種として分布する場合とがあった。今回の調査したなかでは、樹高で約 15m、胸高直径で約 50cm のものが最大だった。樹齢は不明。樹皮は水平に縞模様がみられる。葉が落ちた後、幹に跡を残すからである。しかし老木に縞模様はなく、樹皮が割れて魚の鱗のような模様になる。栽培化されたことはない。

村人は、チャンデーの果実を採集した後、乾燥させて売る。結実期は 2–3 月。芯材の褐色部分が売買されることもある。乾燥果実は、ラオ人の商人が村に来て買い取りを約束した場合のみ採集される。採集可能な期間が短いだけでなく、採集すれば必ず換金できるような天然資源ではないようだ。県内各地から集められた乾燥果実は、県庁所在地のあるサムヌアに集荷され、トラックでボーテン (ルアンナムター県) を経由して雲南省 (中国) に出荷される。ラオス全体で年間 570 トン (昨年実績) が輸出された。調査村のあるフアパン県からは過去 5 年間の平均で年間約 20 トン (最少 0 トン～最大 67 トン) が出荷されたことになっている (ラオス農林省統計)。年によって取引量が大きく変動する。自然要因か市場要因か不明。中国で腹痛に効く製薬原料として用いられるそうだが、実際にどのように使われているのか知る者はおらず、また製品に加工された物を確認できなかった。かつては村内でも伝統薬として使われた。腹痛時に果実を煮だした湯を呑み、あるいは切り傷にチャンデーの木片を充てて消毒を兼ねた湿布薬として利用されたこともあったが、地元での利用は近年みられない。

調査村におけるチャンデー採集実績は、移住前に年間 1150kg (2012 年) だったのに対し、移住後では年間 1360kg (2015 年) となり、村全体で 210kg 増加した。この間、移住に伴い 5 世帯減少し、当該村の世帯数は全 27 世帯となった。またこの間に換金できる林産物が 7 種から 1 種に減少した。チャンデーを 100kg 以上採集した世帯は、移住前 4 世帯 (全世帯に占める割合は 12.5%) から移住後 6 世帯 (同上 22.2%) に増加した。一方、チャンデーをまったく採集しない世帯は移住前 15 世帯 (同上 46.9%) から移住後 13 世帯 (同上 48.1%) となり、世帯数で減少し、全世帯に占める割合で増加した。林産物を換金した際の家計への貢献度をみると、年間で現金収入の半分以上をチャンデーが占めるという世帯が 10 世帯あり、そのなかにはチャンデーが唯一の現金収入源になっている世帯もあった (2015 年)。チャンデーによる収入が調査村の人々の生活と深くかかわっていることがわかる。チャンデーへの採集圧力が高まる傾向にあるが、村内にチャンデー採集をめぐる新しい取決めを策定する動きはない。カボチャやカボチャの種を販売する等で、他の現金稼得策を模索する動きが一部の世帯にみられる。チャンデーの出荷停止は、資源の枯渇といった自然要因によって起きるだけでなく、買い付け商人が現れなければ容易に停止することがわかった。あるいはまた、チャンデー採取が他の現金稼得策と比べて魅力を失えば停止しうることがわかった。



写真 3. チャンデーの樹皮



写真 4. チャンデーの種子と稚樹

今後の展開・反省点

調査は 3 月初旬と 11 月初旬におこなったが、チャンデーの花や実を確認できなかった。また実際に商人と取引きされている様子もみることができなかった。文献では 8 月から翌年 3 月にかけて開花するとあったが、実態調査には当該期間をカバーするぐらい時間に余裕のある計画が必用だ。また、チャンデーは文献上チャンダイの地方語に位置づけられているが、地元ではチャンダイをオイナンニーと呼び、チャンダイとチャンデーとは別種だと認識する者がある一方で、チャンダイをチャンダイホームとチャンダイボホームとに 2 分類して、前者はチャンデーだが後者はチャンデーではないと認識する者もあり、当初混乱を極めた。種と呼称についていまだにはっきりしないが、はっきり言えることは、調査村の周辺にチャンデーは 1 種類しかなく、少なくとも村人は種を区別しないということだ。

今回の調査は、移住後の生活再編にともなうリスク制御の技法について、非木材林産物 (NTFP) の利用から考察することを目的とした。けれども NTFP がコメや生活用具と直接交換される例はなく、NTFP が生活の再編に与えた影響は捉えにくい。チャンデーは NTFP だが、セーフティーネットとしての機能は弱いだらう。なぜならば換金できる期間が限定的で、また採集しても換金できるかどうかかわからないようなあまり当てにならない NTFP だからである。だとすれば、村人にとってのセーフティーネットはたとえば、無償でコメやモノの貸し借りを可能にするような人的ネットワークになるのだが、

このチャンデーン採取を巡って人的ネットワーク形成を特徴づけられるような形態が見出せるのかどうか、再度検討したい。

【参考文献】

- Neef, A., P. Suebpongsang, C. Manythong, W. Tacheena and K. Ogata., "Can Paper Mulberry Contribute to Building Sustainable Rural Livelihoods in Northern Laos?" *Japanese Journal of Southeast Asian Studies* 47.4 (2010): 403-425.
- Sunil, K. C. *Importance of Non Timber Forest Products on the Economy of Rural Household: A Study in Northern Laos*, Hong Kong: Chinese University of Hong Kong, 2010.
- Channgakham, Phinseng. "The effects of a fertilizer loan on dry-season rice cultivated areas in Laos," *Economics Bulletin*, 15.12 (2006): 1-8.
- 杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺明生, 『地球圏・生命圏・人間圏—持続的な生存基盤を求めて』, 京都大学学術出版会, 2010.
- NAFRI, NUOL, SNV. ເລື່ອງປ່າຂອງດົງ 100 ຊະນິດ ທີ່ສໍາຄັນ ໃນ ສປປ ລາວ (Non-Timber Forest Products in the Lao PDR., A Manual of 100 Commercial and Traditional Products), ສະຖາບັນຄົ້ນຄວ້າກະສິກໍາ ແລະປ່າໄມ້ແຫ່ງຊາດ (The National Agriculture and Forestry Research Institute), Vientiane, 2007.